

## 近江における中世備前焼の基礎集成

山口誠司

### 目次

1. はじめに
2. 備前焼の出土例
3. 出土傾向と流通のあり方
4. おわりに

### — 論文要旨 —

六古窯の一つである備前焼は中世の日本列島において広く流通したやきものである。近江における六古窯については信楽焼や常滑焼、瀬戸美濃焼が目立ち、備前焼は比較的少量で客体的な存在である。全国的な中世備前焼の分布については伊藤晃氏らによって各地の発掘調査成果から集成が行われているが、ここでも近江での出土量は極めて少ない印象を受ける。

伊藤氏らによる集成から約 20 年が経過し、その間の出土事例の増加が考えられることから、本稿では再度、近江での事例集成を行うとともに、近江国内の詳細な状況を確認することで、具体的な備前焼の流通に迫ることを試みた。まず出土事例を列挙し、時系列順にみた出土量・器種・分布状況を検討したところ、14 世紀前半から出土量が増加すること、当初、甕が主体であったのが次第に擂鉢が主体となっていくこと、16 世紀以降は湖東地域から湖北地域にかけての分布が密になる傾向を読み取ることができた。また、検討対象を擂鉢に絞ってより詳細な流通のあり方に言及することを試み、分布の偏りや遺跡単位で見たときの出土量の偏差を明らかにした。

### ——— キーワード

中世 近江 備前焼 生産 流通 使用 擂鉢